

## アンチ・コギャルの先駆者のフライド

87年から6回にわたって開催された「国民的美少女」は、おニャン子へのアンチテーゼとして始まったと言われている。

今回の復活が、コギャルへのアンチテーゼの意味合いがあったかどうかは断言できないが、少なくともコギャルの教祖（だった）、安室奈美恵が、芸能界に入るべく沖繩アクターズで「色つけ」された点、デビュー当初からアーチスト指向が強かった点で、オスカーの考える「美少女」とは相容れな



演技審査では、俳優を相手に4人一組になって「海辺のコテージ」というテーマで指定台本による演技を行う。後半部分はアドリブでの演技が要求される。



いキャラクターだったのは想像に難くない。過去の美少女コンを見渡しても、沖繩出身の娘がほとんど出場していないのは、そうしたアクターズ色の強い娘を避けてきた結果であろう。

しかし、ここに来て、チャイドル、広末涼子というアンチ・コギャルの二大潮流が発生。元々美少女コンは小学生高学年〜中学生前半のチャイドル世代の娘を優勝させてきたわけだし、広末涼子にしても、キャラ

**Homepage** | オスカープロモーション  
<http://www.oscarpro.co.jp/>

クター、ブレイクまでの展開などで佐藤藍子との共通点が多い。オスカーには、これらの二大潮流の先駆者であるという、強いフライドがあるのかもしれない。

これらの事象を頭に入れてグランプリの須藤温子を眺めてみると、

「母親世代でも安心できる存在」

「自分の考えを自然に表現できそうな存在」

「極めて庶民的なルックス」

「決してナイスバディーではない」

と、チャイドル、広末涼子の特徴的な部分を微妙にブレンドした素材であることがよくわかる。審査員の圧倒的支持を受けて頂点に立ったのもうなずけるところである。

その他の出場者では、瞳にパワーがある藤谷舞、太ももがそそられる滝本佳実、小悪魔の雰囲気松下萌子、モデルの石川亜沙美（90年美少女コン出場）を彷彿させる池端忍、ちよっぴりエッチな牧野沙弥、そしてバリバリのアイドルノリの沙月佐知子、斎藤美代、浜田麻季あたりは21世紀の「お宝」候補としてチェックしておきたいところ。一方、井川絵美、安達涼子、後藤未蘭の高3組は揃ってナイスバディーで「美少女」のコンセプトにはそぐわないが、コンスタントな需要のあるセクシー系タレントとして、数年後には各種展示会、あるいはレース場での肢体を拝めることだろう。

菅野美穂の写真集騒動で翌日の新聞の扱いはどうなるかと危惧していたが、結果的には同じくらい扱いで紙面に登場。意外と須藤温子は「時の運」を味方につけられるタイプなのかもしれない。（深谷健二）